

## 台南におけるモダニズム詩人の発掘

### 0. 報告者の研究

- ◇『台南文学 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』（関西学院大学出版会、2015年）  
：佐藤春夫・前嶋信次・庄司総一・西川満・國分直一・新垣宏一
- ◇『台南文学を掘り進む 日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』（関西学院大学出版会、2019年3月刊行）  
：呉新榮・楊熾昌・莊松林・王育徳・葉石濤

### 1. 台湾の人口

現在（2016年）：約2350万人 \* 面積は九州ほどの大きさ

日本統治期（1938年前後）：

	内地人(日本人)	本島人(台湾人)	計	内地人の割合
台湾 1938年	308,869	5,393,178	5,746,959	5.4%
台北州 1937年	129,407	948,657	1,101,898	11.7%
台北市 1937年	86,685	202,122	302,654	28.6%
台南州 1938年	48,130	1,401,456	1,456,818	3.3%
台南市 1938年	16,969	104,173	124,351	13.6%
高雄州 1938年	44,097	770,615	821,753	5.4%
高雄市 1938年	25,970	81,892	109,857	23.6%

### 2. 台湾の歴史

先住民族の時代 → オランダ時代 → 鄭氏政権時代 → 清朝時代 → 日本統治時代

→ 国民党統治時代 → 民主化の時代

- 1544年 ポルトガル船員、台湾を「麗しの島」（イラ・フォルモーサ、華麗島、美麗島）と呼ぶ
- 1624年 オランダ、台南地方を占領。ゼーランジャ城（安平古堡）、プロビンシャ城（赤嵌楼）を築く
- 1661年 鄭成功、オランダを台湾から追放（鄭成功は翌年死去）。鄭氏三代が台湾南部を開発
- 1684年 清朝、鄭氏を滅ぼし、台湾は清国領となる。台南に「台湾府」が置かれる
- 1885年 台湾、福建省から独立して、台湾省となる。初代巡撫 劉銘伝、台湾の近代化に着手
- 1894年 首府、台南から台北に移る。日清戦争勃発
- 1895年 日清講和条約締結。清朝、台湾を日本へ割譲。台湾総督府が置かれ、抗日勢力を鎮圧
- 1898年 児玉源太郎総督、後藤新平民政長官が着任
- 1930年 霧社事件、先住民族が蜂起、日本軍が鎮圧
- 1945年 日本降伏。中国国民党が台湾を接収
- 1947年 二・二八事件、本省人（台湾人）と外省人が衝突、国民党軍が鎮圧
- 1949年 蒋介石率いる中国国民党、首都を台北に移す、戒厳令施行
- 1987年 戒厳令解除。この前後に「民主化」「本土化」が始まる
- 1990年 台湾出身の李登輝、中華民国総統となる

### 3. 台湾の民族と言語

多様な「族群」：エスニック・グループ、民族集団の話す言語

先住民族＝【原住民族】

（人口の約2パーセント）

：各民族の言語（オーストロネシア語族に属する計16の民族）、〔日本語〕、中国語、閩南語  
山岳地帯・東部・離島に居住する先住民族＝「生蕃」「高砂族」「高山族」  
平地に居住する先住民族＝平埔族＝「熟蕃」 \* 「生蕃」⇔「熟蕃」

漢族＝本島人＝本省人 17世紀以降、海を渡って台湾へ

【閩南人】：閩南語、〔日本語〕、中国語 (人口の約74パーセント)

【客家人】：客家語、閩南語、〔日本語〕、中国語 (人口の約12パーセント)

\* 先住民族 ⇔ 漢族、本島人 (台湾人) ⇔ 内地人 (日本人)、本省人 ⇔ 外省人

【外省人】1945年以降、国民党とともに台湾へ

：〔各自の出身地の方言〕、中国語、閩南語 (人口の約12パーセント)

\* 現在では、外省人も二・三世となっており、外省人としての意識は弱まっている。エスニック・グループによる区分は (少なくとも政治などの面で) 必ずしも有効ではなくなっている

#### 4. 台南の日本人作家たち

【佐藤春夫 1892 - 1964年】：大正を代表する作家の一人

和歌山県新宮出身、1910年 永井荷風に憧れ、慶應義塾大学文科予科に入学。

1920年夏 3ヶ月あまり高雄等に滞在、台南・安平にも旅行。

『女誠扇綺譚』(『女性』1925年5月。のち『女誠扇綺譚』第一書房、1926年)

【前嶋信次 1903 - 83年】：イスラム史学者

山梨出身、東京帝大卒業後、1928年台北帝大助手となる。1932 - 40年の約8年間、台南に滞在し、台南第一中学校に奉職、王育徳らを教える。歴史研究を行い、台南と関わる多くの考証や随筆を執筆。

1951 慶應義塾大学語学研究所に勤務 1954 文学部専任講師 1956 教授

杉田英明編『〈華麗島〉台湾からの眺望』(前嶋信次著作選第三巻、平凡社東洋文庫、2000年)

【庄司総一 1906 - 61年】：慶應出身の作家

山形出身、台南で育ち、台南第一中学校を卒業。慶應義塾大学英文科入学、西脇順三郎に学び、師と仰ぐ。三田派の若手作家として頭角をあらわし、台南の伝統的な家庭を舞台とした『陳夫人』で大東亜文学賞を受賞。

『陳夫人』(第一部、1940年、第二部、1942年、いずれも通文閣)

【西川満 1908 - 98年】：早稲田出身の作家

会津生まれ、台北で育ち、早稲田大学仏文科を卒業後、台北に戻って『台湾日日新報』の学芸欄を編集し、文学活動を展開、戦時中の台湾文壇における中心人物の一人となる。1940年1月台南を訪問。

「赤嵌記」(『文芸台湾』第1巻第6号、1940年12月)

【國分直一 1908 - 2005年】：民族考古学者

東京生まれ、高雄で育ち、台南第一中学校を卒業、京都帝大で学ぶ。1933 - 43年の約10年間、台南に滞在し、台南第一高等女学校に奉職。考古学の発掘、民族調査に従事し、台南研究や随筆を数多く執筆。

『壺を祀る村 南方台湾民俗考』(台北：東都書籍、1944年。『壺を祀る村 台湾民俗誌』と改題して、法政大学出版局、1981年)

【新垣宏一 1913 - 2002年】：作家、教育者

高雄で生まれ育ち、高雄中学校・旧制台北高校・台北帝大を卒業。1937 - 41年の約4年余り台南に滞在、台南第二高等女学校に奉職。当初佐藤春夫「女誠扇綺譚」を好んで文学散歩をするも、前嶋や國分から刺激を受けて、民俗研究を開始、台南を舞台とした小説を執筆。

「城門」(『文芸台湾』第3巻第4号、1942年1月。西川満編『台湾文学集』大阪屋号書店、1942年8月所収)

「盛り場にて」(『文芸台湾』第4巻第1号、1942年4月)

「訂盟」(『文芸台湾』第5巻第3号、1942年12月)：王育徳兄弟を描く

## 5. 台南の台湾人作家たち

### ○「塩分地帯」の詩人たち：台南北郊の「塩分地帯」と呼ばれた文運盛んな地域のグループ

【呉新榮 1907 - 67年】：医者、作家

台南北郊の「塩分地帯」に生まれ、台湾人の通う公学校を卒業、台南の総督府商業専門学校予科を経て、岡山の金川中学校、東京医学専門学校を卒業。故郷近くの佳里で開業し、医者をしながら地元の青年たちと文学グループを結成し、「塩分地帯」から全島へ向けて民族主義・左翼思想の色彩が強い文学を発信。

他に、郭水潭（1907 - 95年）、林芳年（1914 - 89年）など

### ○「風車詩社」の詩人たち：台南市内に生まれたモダニズム詩人のグループ

【楊熾昌 1908 - 94年】：シュルレアリスム詩人

台南市内に生まれ、台南第二中学校を卒業、東京に留学（詳細不明）。1933年から『台南新報』学芸欄を編集、同年台南のモダニズム詩人たちを結集して「風車詩社」を結成。

同人雑誌『風車』第3号（1934年3月）：現存する唯一の号

他に、李張瑞（1911 - 51年）、林修二（1914 - 44年、慶應大出身、西脇順三郎に師事）など

\* 映画『日曜日の散歩者 わすれられた詩人たち』（黄亜歴監督、2015年。日本公開は2017年）

### ○「台南芸術倶楽部」の中国語作家たち

【莊松林 1910 - 74年】：民族運動家、作家、民俗学者

台南市内に生まれ、台南第二公学校、台南商業補習学校を卒業後、中国廈門に赴き、集美中学で学ぶ。台南の民族運動を推進、中国大陸で成立しつつあった「国語」、つまり北京語をもととする標準中国語を用いて文学の活動を展開。当局の忌避するところとなり、台南の民俗研究に沈潜、前嶋・國分らと交流。

李献璋編『台湾民間文学集』（台北：台湾新文学社、1936年）

他に、林占鰲（1901 - 79年）、林秋梧（1903 - 34年）、趙櫛馬（1913-38年）、張慶堂（生没年未詳）など

### ○若い世代のライバルたち

【邱永漢 1924 - 2012年】：作家、実業家

台南市内に生まれ、主に日本人が通う南門小学校を卒業し、台北高校尋常科に進学、台北高校・東京帝大で学ぶ。戦後香港を経て日本に移住し、1955年「香港」で直木賞受賞。

『濁水溪』（現代社、1954年）：旧友王育徳をモデルとする

【王育徳 1924 - 85年】：台湾語研究者、台湾独立運動家

台南市内に生まれ、台湾人が通う末広公学校を卒業し、台南第一中学校、台北高校・東京帝大で学ぶ。一中では前嶋信次に教わる。台北高校時代は兄王育霖とともに文芸部で活動、台湾に関する優れた随筆や論文を発表。戦後二・二八事件で兄育霖が殺される。日本に亡命し台湾語を研究、日本で台湾独立運動を展開した。

『「昭和」を生きた台湾青年 日本に亡命した台湾独立運動者の回想 1924-1949』（草思社、2011年）

【葉石濤 1925 - 2008年】：作家、評論家

台南市内に生まれ、末広公学校、台南第二中学校で学ぶ。國分直一から影響を受け、考古学少年となる。卒業後台北で西川満の雑誌『文芸台湾』の編集を手伝い、若くして小説を書く。戦後小学校の教師をするも、白色テロに遭い投獄され、長い沈黙を経て、1970年代から中国語で評論や小説を発表。

『シラヤ族の末裔・潘銀花 葉石濤短篇集』（中島利郎訳、台湾郷土文学選集IV、研文出版、2014年）。

## 6. 楊熾昌・風車詩社研究

### ○葉笛による中国語訳の作品集『水蔭萍作品集』（呂興昌編訂、台南市立文化中心、一九九五年）

### ○黄建銘『日治時期楊熾昌及其文学研究』（台南市作家作品集、台南市立図書館、二〇〇五年）

### ○陳允元・黄亜歴主編『日曜日式散歩者 風車詩社及其時代』（行人文化実験室・台南市政府文化局、二〇一六年）

### ○陳允元の博士論文「殖民地前衛 現代主義詩学在戦前台湾的伝播与再生産」（国立政治大学台湾文学研究所、二〇一七年七月）

\*\*\*\*\*

<p>短詩</p> <p style="text-align: center;">水蔭萍人</p> <p style="text-align: center;">A 白い暁</p> <p>タイナンの敷石道を歩いて 行つた人 うつむいて行つた人 死の国へ…… 白い暁の中へ消えて行つた人</p> <p style="text-align: center;">B 恋人</p> <p>虐殺された女人の首……</p> <p style="text-align: center;">▲ ▲</p> <p>あゝ……君の恋人が笑つてゐる</p>	<p>君の恋人が笑つてゐる</p> <p style="text-align: center;">C 黎明</p> <p>美しい夢……乳色のモヤをとほして 窓に緑りの葉影が私を呼んでゐる ……</p> <p style="text-align: center;">D 秋のほひ</p> <p>ガス灯の立つてゐるアオギリの下 白い手袋 女が 独り立つて……</p> <p style="text-align: center;">(中略)</p> <p style="text-align: center;">G 眠れる女</p> <p>冷たく横はつた死人</p>	<p>彼女は魂の花園を散歩してゐる</p> <p style="text-align: center;">▲ ▲</p> <p>心臓が胡弓をひいてゐる……</p> <p style="text-align: center;">H 夢</p> <p>真赤な血を吐いて死んだ女 今もその血潮に濡れた唇が アルレグロのテンポで唄ひつづけてゐる……</p> <p style="text-align: center;">▲ ▲</p> <p>虐殺者の歌 あゝ……血の讚美歌を歌つてゐる</p> <p style="text-align: right;">一九三二年一月稿 〔『台南新報』1932年1月18日〕</p>
--	--	--

\*\*\*\*\*

### 7. 台南文学研究

【葉笛 1931-2006年】：著名な研究者・詩人。『台湾早期現代詩人論』（高雄：春暉出版社、二〇〇三年）や『葉笛全集』全十八巻（戴文鋒主編、新詩二巻・散文一巻・評論四巻・翻訳九巻・資料二巻、台南：国家台湾文学館籌備処、二〇〇七年）がある。呉新榮・林芳年・楊熾昌など、日本統治期の日本語文学を数多く翻訳・紹介。

【張良澤 1939年-】：彰化に生まれ、台南高等師範に学び、日本に留学して関西大学で修士号を取得し、成功大学中国文学系・筑波大学・共立女子大学で教えた。日本統治期台湾文学の発掘整理において、大きな功績を残した学者の一人。先駆的な王育徳を除けば、日本で台湾文学を研究した、実質的に最初の台湾人学者。一九九七年に最初の台湾文学系を真理大学が開設した際に主任となり、のち同校の麻豆キャンパスに台湾文学資料館を開設。半生の自伝『四十五自述 我的文学歷程』（台湾出版社、一九八八年）は、張良澤自身のみならず、台湾社会の発展、そして台湾文学研究の進展を知ることのできる貴重な一冊。鍾理和・呉濁流・王詩琅などの全集を編集したが、台南文学については、呉新榮の遺族に協力して発掘に力を尽くし、『呉新榮全集』や『呉新榮日記全集』を編集し、中国語に訳した。

【呂興昌 1945年-】彰化出身、台湾大学に学び、成功大学や清華大学で教鞭を執り、成功大学台湾文学系の主任となる。台南の古典文学や、楊熾昌・許丙丁などの台南文学の発掘において多大な貢献をした。『台湾詩人研究論文集』（南台湾文学作品集一、台南市作家作品集、台南：台南市立文化中心、一九九五年）は大きな成果の一つ。

【林瑞明 1950-2018】：台南出身で、成功大学で長く教えた。台南一中や台北建国中学・成功大学・台湾大学大学院で学び、成功大学で教鞭を執った。日本統治期台湾文学研究の第一人者であり、『頼和全集』や『光復前台湾文学全集』を編集。後者は張恆豪・羊子喬との共編。林梵という筆名の詩人でもある。

【羊子喬 1951年-】：台南県佳里出身の詩人。同じく佳里出身の台湾語詩人黃勁連らとともに、塩分地帯の文学活動の復活に尽力。張良澤からの刺激で、日本統治期の台湾文学に関心を持つようになり、資料の発掘を進めた。

【莊永清】：「台南市日治時代新文学社団与新文学作家初探」（『文史薈刊』復刊第八輯、台南市文史協会、二〇〇六年十二月）は、日本統治期台南の文学団体、及び台湾人・日本人文学者を網羅的に紹介した労作。数多くの作家たちを紹介した「台南市日治時代新文学作家簡介」も収める。「日治時代台南新文学史料的歴史考察」（『文学台南 台南文学特展図誌』（林佩蓉主編、台南：国立台湾文学館、二〇一二年）と併せて読めば、台南における中国語・日本語による新文学の団体や作家について、全体像を手に入れることができる。また、呉新榮らによる塩分地帯の文学活動の全体像を論じた、「塩分地帯文学精神系譜初探」（林朝成主編『2011 塩分地帯文学學術研討會論文集』台南：国立台湾文学館、二〇一一年）や、莊松林ら台南芸術倶楽部に拠った文学者たちの活動を論じた、「以文学介入社会 「台南芸術倶楽部」作家群初探」（『文史薈刊』復刊第十輯、二〇〇九年十二月）は、いずれも一次資料を綿密に検討した、台南の文学を研究する上でまず読まれるべき論文。